「菜穂子」と「Thérèss Desqueyroux」の関係

大森郁之助

I

堀辰雄の、彼としては珍しい本格小説とされる「菜穂子」（昭16・3発表）を論ずる場合、その論点としては次の二項目がほゞ通例化しているようである。即ち一つは、女主人公菜穂子及び副主人公都築明青年において、「近代ロマンの世界」の基礎条件として「人それぞれのなかにそれぞれの孤独な世界がある」[註1]ということ。二つには、この作品がFrançois Mauriacの小説「Thérèse Desqueyroux」（1927）の〈影響を受けている〉とか、それを〈下敷きにしている〉或いは〈強く感じさせる〉ということ。――だが、確かにそうなのか？

この中の前者、主要登場人物の〈孤独〉については、かつて、それが近代人の必然と認め・肯定されているのか、それとも克服すべき志向をもって提出されているのかという観点から論究したことがあり、その後、小見を追認した内容の論考もしばしば見られるようになった。それでは後者の〈影響〉は、通念化する以前の作業としてどのように確認されているか？

「菜穂子」の構想が堀の内部に芽ばえたのは何時の頃かといえば、例えば

……一九三五年の夏から冬にかけて、私は信州富士見のサナトリウムに入ってゐた。（略）秋頃、漸く創作欲がおこって来て、前からの腹案である「物語の女」の続編を構想しだしてみたが、どうしてもそれに成功しなかった。（そのときの構想が数年後に漸く成って「菜穂子」となったのである。）

（昭21・11、角川書店刊・堀辰雄作品集第三『風立ちぬ』あとがき）

といった回想によって昭和十年まではまちがいなく溯れよう。但し、十年秋の時点で「前からの」腹案というのがどの位以前からの意かはっきりしない。右の文とほゞ同時期に記された別文では、

……私は何年もその小説を書かうとして空しい努力をした。（略）そのうちにだんだん小説らしい恰好がついて来て、漸く七年後に脱稿した。それが「菜穂子」である。一九四〇年冬の作。

（昭21・10、鎌倉文庫刊『菜穂子』あとがき）

とあって、完成年次から逆算すると昭和八年に溯ることになるが、昭和八年といえば「菜穂子」を「その続編」と規定している（同右）「物語の女」（昭9）の成る、前年である。〝続編〟が本篇と並行して構想されていたということも考えられなくはないが、一方ではより私的な書簡ながら「『菜穂子』なども、最初僕が構想したのが、『物語の女』を書いた翌年」だと述べた例（昭16・1・17付、葛巻義敏宛）もあって、いま少し裏付けが欲しい。そこでかりに昭和十年を「菜穂子」構想の始動期（少なくとも具体化期）と見ると、その直後―構想が揺れうごいていた時期の初め頃に、

モオリアックは、小説の技術といふものは、さういふ現実の「再

現」ではなくして、現実の「置き換へ」であるとしてゐる。つまり現実は単なる出発点たるに止め、作家はその漠然たる可能性を実現さすべきであり、その結果人生がとったのとは反対の方向をとるのも好いとしてゐる。「テレエズ・デケルウ」もその一例で、（略）　（昭11・6『新潮』掲載、「ヴェランダにて」）

と、もおりあっく就中「てれえず……」への、小説観の上の共鳴を述べている。私信の中でも、十年十一月――前引「あとがき」類で「菜穂子」の構想に執した第一期としている時期に、

……病中フランスの現代小説（モオリアック等）をだいぶ読んだが、どれもいいものばかりで、それでなんだか書きにくく（引用者注。今構想している作品、即ち「菜穂子」が）なってゐるのかも知れない　（昭10・11・8、葛巻氏宛）

と書いていて、堀自身、「菜穂子」の制作という具体的作業にもおりあっくの影響（たゞしこの限りではいわば負の影響だが）を感じていたことがうかがわれる。

ただしかし、以上の事実は堀が「てれえず……」におのずと影響され又はすすんで下敷きにする可能性を示唆するのであって、実際下敷きにしたことを証するわけではない。ばかばかしい程自明の事ながら、「菜穂子」が特定の作品（作家）からのまとまった影響なしに成ったとは考え難いほどに或る作品（作家）との多量かつ重大な相似要素が「菜穂子」の本文中に認められた場合、はじめて、予想どおり影響があったと云えるのである。さらに言わでもの事ながら、末梢的な事項について部分的な相似があるという場合、それを〈影響〉と称んで当該作品の成立論や本質論に加えるのはどんなものか。せいぜい、それ以外の作品との相似よりは明らかに多いという比較が明らかにされた上で、参考として注記されるというのが、分相応な扱いだろう。

というわけで、焦点は必然的に、「菜穂子」本文のどういう要素、どんな部分が「てれえず……」と相似しているか、そしてそれらを綜合すると「菜穂子」全体としてどれほど多くの部分、どれほど重要な点が相似していることになるか、の点検に移行する。そこで、従来〈影響〉の証し又は注目すべき類似点として指摘されてきた事項を、下登代子氏が丹念に挙例されたのを基に整理してみると、大体次の範囲に収まろう。

	類似点	参考
題名	①共に女主人公の名前を小説の題名としている。	
作品の舞台	②共に、作者自身が住んだことのある地方の小さな村（註4）（Ｏ村、あるじゅるうず）を舞台とする（部分を含む）。	
	③女主人公は共に若い既婚の女性。	てれえずは女児を生んだが菜穂子はまだ子供がない。（註5）
	④共に、〈不安な生〉からの避	

主要登場人物及びその関係		
難所を求めて結婚。 ⑤菜穂子は夫より、てれえずは父や弁護士より、それぞれ背が高い。 ⑥菜穂子は夫や母から、てれえずは夫の妹からそれぞれ嫌がられる、癖のある目つきの持主。	⑦夫は共に、型にはまった世俗的な人間で妻の〈不安〉を理解しない。	⑧主要人物の結びつきの、きっかけが類似。――てれえず及び都築明は子供の頃、夏休みをあるじゅるうず或いは○村の独身者の伯（叔）母のもとで過ごした。その折の隣人が、のちのてれえずの夫べるなある及び菜穂子。
	てれえずの周囲は夫も父も俗物だが、菜穂子の場合は俗物は夫だけで、幼な馴染の都築明は菜穂子と同質の人間。	

構成と展開		
はてれえずの父を点出する。 ――〈寒い季節〉が、そこに展開される事件を暗示？ ⑩冒頭で現在の状況（菜穂子の結婚、てれえずの場合は夫を毒殺しようとした事件の免訴）を描いたのち、回想の場面（子供の頃から結婚まで）が続く。 ⑪菜穂子はさなとりうむに明の訪問をうけた時から、てれえずは出産の直後から、自分の現状を堪え切れなく感じだす。 ⑫菜穂子の病気（肺患）や犯行後のてれえずを、家族は〈神経衰弱とか何とかいうことに〉して世間にとりつくろおうとする。 ⑬てれえずの犯行の動機が不明瞭なのと同様菜穂子が突然さなとりうむを脱け出して上京し夫に合う動機も「定かには分らないやうなところが、	「菜穂子」での「遁走曲を思はせるやうな対位的形式」（中野好夫氏評）[註6]は「てれえず……」には見られない。[註5]	菜穂子は肉体の疾患という不可抗的な理由から、入院というはっきりした形で孤立化するが、てれえずの場合は犯行までは性格的疎隔にとどまる。[註5]

似てゐると言へば似てゐる。」（福永武彦氏評）[註7] ⑭作品の結尾ではてれえずも、夫に自分の心の内を理解してもらいたいと熱望する。	結婚によって生の不安からのがれ得なかった結果としてれえずは夫を毒殺しようとするが、菜穂子は逆に、発作的に上京して夫と心を通じ合おうと願う。

個々の場面

⑮O村で驟雨にあった明が藁葺の氷室に飛びこんで村の娘早苗に会う場面（「菜穂子」四）と、てれえずが村の猟小屋で夫の妹あぬの愛人じゃん・あぜづぇどとぶつかる場面（「てれえず……」六）。 ⑯それぞれの小屋での、明と早苗（五・八）、あぜづぇどとあぬ（四）のあいびきの場面。 ⑰少女時代の菜穂子と明（二十）、てれえずとあぬ（九）が村道を自転車で走っている場面（回想）――手離し乗り、自転車の輪にとびつく犬。 ⑱さなとりうむから上京する列車の中で菜穂子が車内の人いきれや煙草の匂いに（二十二）、又裁判所を出たてれえずがぱん焼き場の霧の匂いに（一）、〈生の懐かしさ〉を感ずる場面。 ⑲東京のほてるで夫と別れた菜穂子が「急に空腹を感じ出し」て食堂に向かう場面（二十四）とぱりのかふぇに置き去られたてれえずが「少し飲み、たくさんタバコをふかし」「みちたりた女のように」[註8]往来にさまよい出る場面（十三）。	

下氏の比較対照作業は管見に入った限りでは最も具体的に、かつ多様多数の事例によって両作品のどこがどう類似しているかを示されたものである。管見に入らなかった恐らく少なからぬ数のれぽおとを考慮に入れても、最たるものの一つではあろうと思われるが、ということはつまり、「てれえず……」との類似乃至影響をまで言う場合にさえも、その殆んどは、主題その他一二の要素の共通や全体的印象の相似を挙げただけで結論に短絡した一種の感想文に類するものだったのである。かくて「菜穂子」と「てれえず……」の関係を考える作業はようやく客観的・実証的と称し得るものになったわ

けだが、更に付け加えれば次のような類比も又、注意されねばなるまい。

第一は、「菜穂子」における都築明と「てれえず……」におけるじゃん・あぜづぇどの対応点である。

都築明は「菜穂子」では疑いもなく副主人公――二番目の重要人物であって、少年時代から菜穂子と関りをもち、数量的にも作品全体のほぼ半ばの章に登場し菜穂子に次ぐ量の叙写をされている。それに対してあぜづぇどは、人物関係としては本来てれえずの義妹あぬの愛人であってててれえずとの直接関係ではなく、従って時間的には毒殺未遂事件の起こる前年の七月から十月までの四ヵ月、章数では第六・七の二章に姿を現わすにすぎない。しかしその間の役割や行動に限ってみれば、明との幾つかの共通項がある。

㊀あぜづぇどは肺病の療養のために（三）一時、ぱりからあるじゅるうずに来ている。（明も養生のため勤め先を休んでO村を訪れる。）

㊁療養先のあるじゅるうずで知ったあぬと、結婚するつもりは全くない（六）儘、一時の情熱に耽る。（明も、O村で諄朴な村娘早苗と親しみ、「何んの話らしい話もしないで逢って」いる

（参考）

あぬは「彼の手がじっと私の胸にあてられているとき」「認められた最終限度の愛撫」を味わう（四）。（「菜穂子」では身体的接触の叙写皆無。）

「以外の欲求は何んにも持たうとはしない」（五）逢いびきを重ねる。）

㊂「思慮の浅い修道院育ちの娘」「かわいい小さなおばかさん」（四）のあぬは盲目的に恋にうちこむ。（早苗も、結婚は思いもしないながら、明といる時の自分が最も「娘らしい娘に思はれる」（八）感情を味わう。）

㊃あぜづぇどはてれえずに、「アヌにはこんな話をする気は絶対に起らなかったろう」ところの「自分自身になること」（七）を説く。（明もさなとりうむを訪ねた折に「菜穂子の事なら今の自分にはどんな事でも分かってやれるやうな」同属感を抱く（十七）。）

㊄てれえずはあぜづぇどに対して言葉の上では反論しながら、自分の出あった「精神の生活に何ものにもまして意義を見いだしている」「最初の男」（六）と

あぜづぇどはてれえずの表面だけを見て別離後は文通にも応じない（八）。（明はさなとりうむを辞した後の旅中も、ふと菜穂子の少女時代を想う（二十）。）

感ずる。（菜穂子も、明の目の前では肯定しなかったがやがて明を「彼女の現在の絶望に近い生き方以上に真摯である」と（十八）認める。）

㈥てれえずはあぜづぇどと「別れてくるがはやいか、はてしのないトルネルの」「たえず深くなってゆく闇の中をつき進んでゆくような気がした。」（七）（菜穂子もこの時から今の孤独の惨めさを切実に考えるようになる（十八）。）

ところで右表の下段に参考注記した、あぜづぇどと明のそれぞれかりそめの恋での肉体的要素の差違は、じつはてれえず及び菜穂子の結婚生活についても言える。てれえずの場合、夫に対する疎隔感（結婚後最初の、自己の孤独の認識）は、夫が「まともな男の愛撫と嗜虐性倒錯患者の愛撫を区別」して「決して遅疑するということ」なく「快楽の世界にはいりこんでゆく」夜に、確定した。夫について「心がるすになってもまだ肉は生きており、眠りの中にまで、裂きなれた餌食を、もうろうと求めているかのよう」といった叙写もある（四）。

だがこれらはてれえずを取り巻く男たちと菜穂子の夫・友達との差違、と見ては不十分なのであって、てれえず自身の、菜穂子との差違でもあるようだ。夫を毒殺しかけた事件の落着後、好悪に関らず完全に夫から隔てられたてれえずは、不眠症に陥りながら

自分の過去の世界から、忘れていた顔や、遠くから好もしく思った唇や、不意のめぐりあいや、夜偶然にすれちがったというような事実が、罪を知らぬ彼女の肉体に近づけたおぼろな肉体を、捜し求めた。

彼女は「ぐっと抱きしめる身ぶりをする。自分の右手で左の肩をしっかり押える――そして、左手の爪が右肩にくいこむ」（十一）。むろんこれらの感覚や欲求は、菜穂子には仄めかされてもいないものである。

てれえず自身と男たちを一括し、これと対比して肉体的・肉欲的要素を作品の世界からしりぞけた堀の資質を際立させることは勿論妥当だろう。

だが、嫌悪にしろ孤独感にしろ又は愛着・熱望にしろ、成熟した女性におけるそれらは肉体的な要素をも伴なっている方が言葉どおりの意味で現実的――少なくとも日常的だといえるならば、〈自分の子供〉という要素もまた、問題をより現実的・日常的にする役割をもつものではないか。てれえずは、「子供の中に自分を埋没させる」ことの「美しさ」を「十分に感じる」と自分に言いきかせる。しかもなお「私は自分自身でいっぱいなのだ」「どんなときでも、自分を見つけていなければ気がすまない」ことをも肯定し、やがて子供が片言をしゃべるようになった時を予想しても、

しばらくは気ばらしになるだろう、（略）けれども、じきに、う

るさくなるであろう。早く自分自身とだけになりたくて、いらいらしてくるだろう……（十二）

と考える。つまり彼女の家庭離脱の欲求は、子供――とくにまだ一人格として感じられず肉体的なつながりの感じによって捉えられる年令の幼児（への愛着）という、一の形而下的条件による検証をも経ている。すでに母親でもある女性としての、肉欲とは別のもう一つの肉体的要素、問題を日常的にする要素とつき合わせた上で、なおかつ抑え難い孤独志向、という形をとる。

それに対して子供のない菜穂子の孤独志向は、日常現実的性格はより稀薄なものといえるだろう。むろん子供のない人妻という事自体は非現実的でもなく非日常的でもないが、堀辰雄が「てれえず……」を意識していたことは（少なくとも意識したことは）疑えないならば、その女主人公の条件を基準にしてやはり菜穂子は日常現実性を薄められている。そう言ってわるければ、より純化されてしまっている。そうして女主人公が肉体的欲望を描かれず又、肉体的な愛着の対象であるような子供を持っていないというのは、堀の殆どの作品に共通することである。（「聖家族」の絹子や「かげろふの日記」の道綱、「楡の家」の菜穂子、「ふるさとびと」の初枝などは、既に一人格として愛し憎まれる年令になってから登場している。）

このように考えると、てれえずをめぐって存在した男女の性欲や幼い子供などの〈主題の純度を低める〉〈形而下的・日常現実的〉要素が菜穂子の身辺には存在しないことは、菜穂子の、堀の作中人物らしさ、といえようか。都築明についても、役割や諸行為はあぜづぇどと殆んど共通でありながら性的要素の有無において明確に堀的である（若しあぜづぇどを模したとすれば、堀化してある）といえよう。以上を、前掲の総まとめに補足すべき第二点としておく。

そして、それとは些か性質の異なる問題だが、あぜづぇどと都築明の異同のついでにいえば、あぜづぇどに比して明の善良さも挙げられようか。同じく女主人公が神経を焦ら立たせる相手であってもてれえずの夫に比して菜穂子の夫が俗悪にも至らない、単に平凡な男にとどまっていることは屢々指摘されるが、明も又、あぜづぇどがてれえずを「アヌと同じように、彼の言葉を、言葉どおりにとって、いっさいを捨てて、彼のあとを追ってきかねない女だと思って」避ける（八）ような卑俗な薄情さは付されていない。

さて、第三に見落してならないのは、作品の末尾の、菜穂子と夫圭介、てれえずと夫べるなあるの応対の場面の、類似である。――類似？相違のまちがいではないのか!?――たしかに、最終的にはてれえずは夫の方から逆に和解を拒絶され、菜穂子はといえば圭介との生活に「新しい道」を仄見ている。[註2] 結果からいえば正反対である。またそもそもこの場面自体「てれえず……」では夫が妻をぱりに放逐しに来ているのだが「菜穂子」では妻が夫に逢いに上京している。場面の成立している事情も正反対なのである。にもかゝわらず次のような部分的な、場面構成要素の相似があることは、だからこそ一層注目に値いしょう。

「菜穂子」	「てれえず……」
(a)新宿駅から電話して夫を呼び出した菜穂子は、最初の挨拶の	

代りに「何も云はなくとも、その眼の中を覗いて何もかも分かって貰ひたさう」に「只大きい眼をして」夫を見つめ、夫は「持前の弱気から思はず」眼をそらす。（二十三）

(b) 麻布のほてるに落着いたのち、圭介は「たとひそれがどんな不安に自分を突き落す結果にならうとも」「訊かずにはゐられないやうな、突きつめた気持ち」で、菜穂子の上京の真因を問いただす。（二十四。以下同）

(b′) 別れる直前になってべるなあるは妻の行為の真因を理解したい激情に襲われ、そういう自分の「うまれ変ったような」変化に「驚きをおぼえ、いらだたしさを感じ」ながら問いかける。（十三。以下同）

(c) 菜穂子は自分だったら何より先にそれを問いただしたろうと思いながら、「それでもとうとう自分の心に近づいて来かかってゐる夫」をもっと引きつけようと思う。

(a′) （その折）べるなあるはてれえずの視線をささえ得ずに目をそらす。

(c′) てれえずは夫が遂にそれを訊ねたことを、「ことによったら」これまでの自分の努力が報いられるかと考え、「好意にみちた」「ほとんど慈愛深いと言ってもいい視線を」そそぐ。

(d) 圭介は、昂奮が収まり今暫く別居を続けようと決めた時「時計を出して見た。」

(d′) べるなあるは、「なぜ、理解したいという突然の欲望に負けてしまったのか？」と「くやしく思」い、この場に「けりをつけ」ようと「自分の時計をながめた。」

(e) 圭介がふと妻の帰って行く雪山を思い描いていた間、菜穂子は、夫が「ひょっとしたら」「『もう二三日此のホテルにこの儘居ないか。さうして誰にも分からないやうに二人でこっそり暮らさう。……』そんな事を云ひ出しさうな気がし」て、「何んとはなしに無心なほほゑみらしいものを浮べた。」

(e′) てれえずは、夫が今から車を走らせてゆく街道を思い浮かべ、「もしもべるなあるが『許す、いっしょにおいで……』と言っていたなら」ついて行ったろう心境で「例の美しい微笑」をうかべる。

勿論似ているのはこの段階までである。二人の妻の相似た「ほほえみ」に対応して、圭介は「もう少し全べてが何んとかなるまで」はこの儘菜穂子に我慢させようと、心を残しつつ結論するのだが、べるなあるは、「デスケイルウ家には代々独身者がいた」が自分もその一人になる「必要な資格は全部そなわっている」と宣言して、永久の別居を「万事これでよしさ」と肯なうのである。従って、夫が立ち去って一人になった時の、妻たちの心情も異なる。菜穂子は「自分が明日帰って行かなければならない山の療養所の吸ひつくやうな寒さを思はずにはゐられなかった。」つまり彼女にとっては、再び一人にされることは現に快適でも愉楽でもないし、そう変ることを予想もできない。だがてれえずは

プイイの小びんのおかげで、ぽっと身うちのほてるまんぞく感がわいてきた。タバコをたのんだ。隣のテーブルにいた若い男が、ライターをすって彼女の方にさしだした。テレーズはにっこり笑った。

その時、夫や婚家はすでにてれえずの心からも遠ざけられており、「たった一時間前には、ベルナールと並んで、その暗い夜道を行くことを願っていたとは！」と自ら呆れる程の乖離が生じてしまうのである。

堀が菜穂子の生、とりわけ結婚生活を、究極的にどのようなものと見たか、と云えば、てれえずとは正反対のものとしたと言い切ってよいだろう。その一方で、最終結果にたどりつく迄の過程においては、或いは一つ一つの行為としては、一二ならず同型同趣の行為が存在する。単一の場面の中でこれほどの相似がある以上偶然の一致とは最早考えられないとすれば、これはいったいどう評すべきなのか？最終結果（内実）はこれほど違うのだから途中（外形）も異なって当然なのにこれほど似せたのは、結局「てれえず……」の模倣なのだ、と云うべきか？それとも逆に、これだけ外形は似ながら内実が異なるのは、堀のおりじなるになっているということだ、と見るべきなのか？

II

「菜穂子」の制作動機、というよりもその具体的な構想を支えて行った要因としては〈もおりあっくの小説――「てれえず……」の〉いめえじ〉の他に、堀がゆくりなく見かけた一人の見知らぬ女性の印象というかなり〈小説的〉な挿話がよく知られている。創元社版『菜穂子』（昭16・11刊）のあとがきとして書かれたものといわれる遺稿「『菜穂子』覚書」によれば、堀は昭和十年の或る大雪の日の夕方、人けの絶えた銀座裏の珈琲店（昭16・1・17付葛巻義敏宛書簡によれば「ジャアマン・ベエカリイ」）で「一人の頬が異様にこけ、何処となく知的な感じのする目つきをした若い女」に気づいた。彼女は人を待っているらしいが「少しもいらいらした様子はせず、むしろさういふ大雪の日にさうやってぼんやりと人を待ってゐるのが何か彼女の気に入ってゐるやうに見えた。……」そして、そうした女の印象が、「山の療養所で、何度も試みかけては失敗して遂に全く断念してゐた或る小説の女主人公」を堀の心に鮮かに蘇らせた――というのである。

私はその女と共に、いつまでも雪の往来に出て行かうとはしないで、その儘、そこでさういふ若い女のどこか悲劇的な感じのするポーズを土台にして、自分の小説をすっかり始めから組み立て直し出してゐた。（略）

私はその珍らしく雪の多かった冬の日々、屢々町なかへ出掛けて行っては、雪の日になると私にひとりでに髣髴してくる一人の若い女の姿（略）をもっと持続的に捉へたいと思ってゐた。

その「小説」が「菜穂子」として実現するには「五六年かかったわけ」（前引、葛巻宛書簡）だが、この見知らぬ女性の印象は「その儘、小説の最後の場面として僕の裡に出来た」（同）という。この日の印象――この女性の姿によって最終の場面だけはこの折に構想が完成したのだが、そこに到る迄のぷろっとはその後六年かかった、

ということであろうか。全体の構想は難渋し変転したが最終の場面だけは動かなかった、この女性の姿が構想の基軸であり了せた、と。

はじめに小説的な挿話、と評したが、しかしそれ以上につくりごとまで疑ういわれはない。とすれば、「菜穂子」具象化の核として最深部にはたらいていたのはこの銀座裏の現実体験であったわけだ。それと対比すれば〈もおりあっくの小説〉という書物体験はそれ自体すでに一つのまとまった形をなしている表現であるゆえに、その影響を先ず発想の外形に対して生じた（少なくとも、発想の外形に対しても亦はたらいた）ろうことが考えられる。

この想察はさきに見た「菜穂子」と「てれえず……」の実際の類似し方（何が類似し何が類似しないか）、とくに最後の場面の類似し方と合致する。しかし今ここで注意したいのは、「菜穂子」のもちいふの形象化に六年間変らずはたらいた要因として確実なのは大雪の夕方の女のいめえじだ、ということである。

「てれえず……」――〈もおりあっくの小説〉のほうは、必ずしもそうは云えないのではないか？

些末な事とも云われそうな徴証から挙げると、昭和十年（「菜穂子」の構想の始まり）の葛巻氏宛書簡で「菜穂子」の難産と関連させて言及した〈もおりあっく〉が、同一人物に宛てた十六年（「菜穂子」完成後）の書簡（共に前引）では全然触れられていないことである。書簡で触れていなくてもげんに完成した「菜穂子」本文には「てれえず……」との類似個所が確認できるではないか、これが問答無用の証拠だ、という論じかたもあろう。だが、げんに客観的類似はあっても堀の意識に於ては少なくとも昭和十年の時点の関係とは変っていたから言及しなかったのではないか、という疑いかたもあるはずだ。

そこで、昭和十年の時点と「菜穂子」完成後とで堀の意識が変っても妥当といえるような客観事実はあるか？ということになろう。「菜穂子」完成後の意識がその完成した「菜穂子」本文に対応するものであり、一方昭和十年の意識はその頃難渋していた（恐らく現存「菜穂子」とは異なる形の）構想と対応するものとすれば、昭和十年の時点のものかどうかは明らかでないがともかく現存本文の構想以前のものと思われる別案の、あらすじを記した遺稿（補注）の存在が知られている。角川版・十巻本全集第七巻の本文によって、そのあらすじの主要項目を掲げると大略次のとおりである。

Ⅰ（註9）

○巣立ち

1（背景として）東京郊外の美しい校庭をもつ女学校。

2菜穂子と学友たちの、結婚についての話題。

3菜穂子と外人教師の感情の齟齬。

4菜穂子を一人前の人間として扱う受持教師。菜穂子の感謝。

○菜穂子

5一人で森於兎彦を訪問。森の

（「てれえず……」との照応）

女学校自体は描かれず。

なし。

なし。（相当人物なし）

てれえずをたびたび生徒たちに手本として「推薦」した、女教師たち。

森に相当する人物登場せず。

一瞥による菜穂子の変化。		
6森の女弟子と雑誌記者の駈落ち。森の配慮。	なし。（相当人物なし）	
○春の旅		
7（都築）明の○村訪問。病気の娘を持つ美しい寡婦おきぬ（現存本文のおえふに相当）への思慕と菜穂子への関心の対立。	相当する寡婦登場せず。	
8三村夫人が、娘菜穂子との葛藤（？）を明に暗示。	（夫人に相当する）てれえずの母はすでに産褥で死亡、登場せず。	
○彼と彼女		
9菜穂子、縁談を逃避して友達と○村に行く。	なし。	
10兄からの手紙、〈結婚生活の中でこそ自分自身となる〉ことを説く。	*兄なし。	
11母の、娘を信頼した好意ある放任主義。	なし。（相当人物なし）	
○物語の女		
12菜穂子、母と決裂し○村を去る。そのあとの明の寂しさ、母とおきぬの出会い。	なし。（相当人物なし）	
○三年間		
13菜穂子と、気力なく母の言うなりの夫との不幸な結婚生活。	べるなあるは結果的に母と同意見のことが多いにしろ、元来〈自信たっぷりの〉男。	
14結婚前後の回想——突然の結婚を心痛した母の急死。	なし。（相当人物なし）	
15音楽会で、菜穂子と明のあわただしい邂逅。	（内容上相当する場面は）なし。	
○牧歌		
16明、病気のため建築事務所を辞め○村に静養に行き、村の或る娘（早苗に相当）を愛す。氷小屋でのあいびき、村の巡査の求婚。	義妹あぬとあぜづぇどの関係に、対応。	
○孤独		
17婚家での菜穂子の孤独感。姑の〈ひたむきな情熱〉と、菜穂子の心身の衰え。	ほぼ照応。たゞし毒殺事件で罪を問われるまでは、てれえずは姑に対して菜穂子ほど守勢に偏ってはいない。	
18菜穂子の女友達、田舎の両親に抗って東京にとどまる。	相当する人物登場せず。	
○晩秋		
19夏の末、夫と二人山中湖畔に	新婚旅行が対応するか？べるなあ	

滞在――老残の森於兎彦の姿。母に世話されつけた夫のまごつき。	るは旅行中〈狩猟と柘榴酒〉のないのと嘲笑的な妻とに堪えきれず、帰宅をいそぐ。（森に相当する人物は出ず）	
Ⅲ		
○冬の旅		
20村のおきぬ、娘の手術に上京。明、彼女を見舞う。	なし。（相当人物なし）	
21明、冬の旅に出て病み、帰京して、春さき淋しく死ぬ。	なし。（あぜづぇどは結尾でも存命）	
22菜穂子の女友達、自分の愛人を見舞ったさなとりうむで明に会う。	なし。（相当人物なし）	
○サナトリウム		
23菜穂子胸を患い、姑が無理に入院させる。夫、母に反撥して妻を見舞う。	てれえずには病気なし。出産の際も姑、夫と同居。	
24菜穂子、森の死と彼の三村夫人への愛を知り、生前の母への反抗を悔いる。	なし。（相当人物なし）	
○秋		
25菜穂子の夫、母に反抗して酒場に出入し、菜穂子への手紙も切実になる。	なし。（べるなあるにはそうした心情なし）	
26夫、かつて○村に駈落ちして来た女に酒場で出会う。	なし。（相当する女出ず）	
27菜穂子の女友達、前から好きだった年下の男と同棲しつつ女学校の教師をしている事を（菜穂子が？）知る。	なし。（相当人物なし）	
○雪		
28雪催いの日、菜穂子さなとりうむを脱け出す。（以下現存本文と同趣）	（現行「菜穂子」本文とは個々の行動の対応があるが）上記の要約された主意とは対応せず。	

このように整理してみると現行「菜穂子」よりもむしろそれ以前の別案の方が、「てれえず……」との結び付きを感じさせること少ないのではないか。もっともそれには、具体的な本文を欠いたあらすじのみの別案と、現行「菜穂子」とでは、どこまで精しく対照しうるかが違うせいもあろう。一例をあげれば右表28番の項目は、別案としてはその主意しか比較し得ないから「てれえず……」とは異なると云っておくしかないが、現行「菜穂子」にあてはめて考えれば主意の相違は相違として個々の行動の対応をも並記せねばならなくなるという、不利（？）がある。

だから、二種類の対比から直ちに、時間の経過と共に「菜穂子」はより細部まで「てれえず……」を模して行った――頭初は具体的影響はごく小範囲だったのに――などと、断定するわけにはゆくまい。だが、それはそれとして、妙な事に気づかされる。別案が現行本文と同程度に〈「てれえず……」との対応〉を含んでいてもあらす

じだから表われ得ないのだと仮定すると、現行本文が別案よりまさって見える〈対応〉も、その殆どは、あらすじに与からぬ些末又は傍系の類似であると認めることになろう。さきに列挙した現行「菜穂子」の「てれえず……」との対応・非対応の実況自体の印象はどうか、といえば、そう考えることを許さぬという程のものではあるまい。かといって逆に、そう考える他ないという程でもない――といった処ではなかろうか。しかしその考えかたを、実際の感じとは別に、論理上一方に規定されてしまうわけである。

つまり遺稿の別案は一種の両刃の剣となって、われわれに「菜穂子」と「てれえず……」の関係を、二者択一の形でだがどちらをとっても、かなり冷酷に考えることを求める。別案と現行本文との間に「てれえず……」との類似の増加を想定する立場をとれば、「菜穂子」の具象化に難渋する中で極めて具体的な一場面・一行為の類似が増して行ったことになるから、その場合「てれえず……」は主として堀のいまじねいしょんの不足を安易に補う、狭義の〈表現〉のよりどころだったということになるだろう。又、そういう増加があったと考える必然性がない、という立場をとるならば、「てれえず……」は「菜穂子」にとって、幾通りか（？）の相異なった構想がめいめいに具体的な表現をそこから取り込み得た、かなり気楽に利用されるお手本だったか、と疑われても仕方がないことになろうから。――

注1　昭26・5刊、角川文庫『菜穂子』解説（加藤周一）

2　『国学院雑誌』昭41・6、7収、「『菜穂子』の涯」

3　『国文鶴見』4号（昭44・3）収、「『菜穂子』と『テレーズ・デケイルウ』」

4　遠藤周作氏によれば、「てれえず……」の場合必ずしも実際の地理どおりではなく、土地の位置関係や地名、交通機関などに明らかな虚構を混えている、という。（昭47・1、朝日出版社刊『対談　世界の文学』収「『テレーズ・デスケイルウ』と私」）

5　菊池孝子君の注意による。（昭和四十九年度札幌大学女子短期大学部国文科卒業論文「菜穂子――その愛の行方」）

6　『中央公論』昭16・4収、「二つの文学」

7　昭43・10、文治堂書店刊『福永武彦作品・批評B』収「堀辰雄の作品」

8　「てれえず……」の本文は新潮文庫版・杉捷夫氏の訳によった。以下も同じ。

9　I～IIIの数字及び○印を付した見出しは遺稿本文のまま。それ以外は引用者が要約した。

補注　遺稿の「菜穂子」別案がいつごろのものであるかは明らかでない。都築明が市立療養所で死ぬという構想が立原道造の死（昭14・3）に拠ると見れば上限は定まる。しかし下限の方は今、極めて単純に、〈「菜穂子」は現行本文のような構想で完成したのだから、それと異なる構想は現行のように固まる以前のもの〉と考えたのだが、当時の堀の心境については例えば中村真一郎氏の次のような証言がある。

あの作品を書くずいぶん前から、こういう作品を書くのだと、堀さんがよく話した。情景も筋も話した。できあがったものは、それに比べるととても小さい。（略）だから、あれを発表してしまったあとでも、なんでも自分はこれを書きなおすんだと言って付録みたいなものを書いてみたり、最後まであきらめないで、なんとかあれを自分の考えた「菜穂子」にしようと思ってずいぶん苦労した。

（「解釈と鑑賞」昭36・3収、座談会「堀辰雄の人と文学」）

つまり現行本文の成立以前に限らず以後にも別の構想が有り得たとすると、これ又単純ながら、〈現行本文以前の別案なら現行構想が完成

してしまえば不要なはずで、遺稿として残るのはまだ断念されない、現行本文後の改訂案である場合だ〉という考え方が勢いづくかも知れない。だがこれは、互いに一理ではあっても他を否定するだけの力はないようで、結局、一般論としての断案は不可能であり、堀の場合、又は「菜穂子」現行本文と遺稿案との間では、どちらが蓋然性をもつか、という限定された問題になろう。

そこで前の観点からは、堀に丹念なのおとの作成癖と共に保存癖とでもいうべき傾向のあったことが参考にされよう。とくに、既に作品化を終えたはずののおと「蜻蛉日記」（→「かげろふの日記」昭12）・「別荘番」（→「朴の咲く頃」昭15）や、一部が作品化（→「ふるさとびと」昭17）された「軽井沢I」、或いは逆に、既に刊行されていた『美しい村』ノオトII」の別稿や「かげろふの日記」の「続編を書かうとしていくつか試みては未遂に終ったもののうちの一つ」と付記された「かげろふの日記残闕」、又使用されなかったあとがきである『菜穂子』覚書」などが廃棄されずに遺されたことは、一つの心証となろうか。

後の観点、現行「菜穂子」と遺稿別案の内的関連を考える場合に注意すべきは、別案が現行「菜穂子」及び「楡の家」「ふるさとびと」（いわゆる菜穂子cycle）を一篇にまとめた物のような面をもつことである。別案中の森於兎彦と三村夫人や菜穂子の微妙な関係は現行「菜穂子」では簡単な説明で済まされているが、これは「楡の家」が分担しているとも云えるし、森の女弟子と新聞記者の駈落ちは「ふるさとびと」に挿話的に出てくる。O村の美しい寡婦おきぬの件は現行「菜穂子」にも取込まれているが、それ以上に「ふるさとびと」が彼女を主人公とした作品になっている。

そこで枕草子の雑纂原型説と類纂説ではないが、一つの世界（別案「菜穂子」）にまとめ兼ねて三つの作品に分割したというのと、既成の三つの作品を改めて一つに練り合わせた構想（同）をたてるというのと、どちらが、有り得ることだろうか。前者のように止むなく分割したならその後も後者のような綜合の欲求は（欲求としては）強いかも知れないが、実際の制作として考えた場合、連続てれびどらまの綜集編のような新作品が新作品として受取られるかどうか。読者は勿論だが作者自身にとっても、少なくともいざ着手してみれば大いに疑わしくなりはしないだろうか。それでもなお、とにかく統合することに意義があると感じられたかどうか、である。

更に現行「菜穂子」「ふるさとびと」でのおえふという人名が別案ではおきぬなのも気になる。構想の途中で一部の人名が（別案おきぬから現行おえふに）変わったというのなら判るが、一たん完成発表された現存「菜穂子」の主要人物名はその儘の、誰の目にもあきらかな改作の中で、一人の呼び名だけを変える理由やそういう事態は、想像できるか？

それやこれやを考えると、少なくとも現存資料の範囲では、遺稿の別案は現行「菜穂子」に移行する以前の一段階と見る方が妥当と考える。

（昭51・1・18稿）